



**Data**

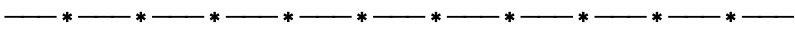
監督・脚本：婁燁（ロウ・イエ）  
 出演：郝蕾（ハオ・レイ）／郭曉冬（グオ・シャオドン）／胡伶（フー・リン）／張献民（チャン・シャンミン）／曾美慧孜（ツァン・メイホイツイ）／崔林（ツイ・リン）／白雪云（バイ・シューヨン）

## 👁️👁️ みどころ

婁燁（ロウ・イエ）監督の問題作だが、天安門事件についてこれだけの描写でアウトとは・・・？

すると注目は、ヒロイン余虹（ユー・ホン）を演ずる郝蕾（ハオ・レイ）の自由奔放なセックスの描き方だが、それには当然賛否両論が。また私的には、『ラスト、コーション』（07年）の湯唯（タン・ウェイ）との対比が不可欠・・・？

この映画に政治的メッセージを期待してはダメ。天安門事件を体験した恋人たちの生きざまと喪失感を真正面から問う映画と割り切らなくちゃ・・・。



## ■原題VS英題VS邦題■

婁燁（ロウ・イエ）監督の第1作『ふたりの人魚』（00年）は、原題『蘇州河』と英題『SUZHOU RIVER』は同じだが、邦題は全然違うもの。しかし第2作『パープル・バタフライ』（03年）は、『紫蝴蝶』＝『PURPLE BUTTERFLY』＝『パープル・バタフライ』と原題＝英題＝邦題だった。しかし、中国当局から国内での上映禁止と5年間の映画製作の禁止処分を受けてやっと日本で公開された第3作は、原題『頤和園』、英題『Summer Palace』そして邦題『天安門、恋人たち』とバラバラ。

原題の『頤和園』は、映画の中で恋人同士がボートに乗ってゆったりとした時を過ごす公園の名前をタイトルとしたもの。これは清朝末期にあの西太后が莫大な費用をかけて造った庭園として有名で、北京ツアーの定番となっているところだ。他方、英題の『Summer Palace』は直訳すれば「夏の宮殿」だが、さてそのココロは？それに対して、『天安門、恋人たち』はストーリーに注目してつけられた邦題。したがって、その内容

はよく伝わってくるが、少し凡庸な感じも。さて、あなたは原題、英題、邦題どれが好き・・・？

## ■□■ 図門とは？北清大学とは？ ■□■

この映画の冒頭はいかにもロウ・イエ監督らしい(?) ざらついた色調の映像の中、中国東北部地方のまち図門に生きる青年暁軍(シャオ・ジュン)(崔林/ツイ・リン)と少女余虹(ユー・ホン)(郝蕾/ハオ・レイ)が登場する。図門は北朝鮮との国境に近いまちだから、中国語の他「アニハセヨ」という朝鮮族が使う韓国語が登場してくるのは当然。

時代は1987年。そんな時代に、こんな片田舎に住む父親と2人暮らしの少女ユー・ホンが北清大学からの合格通知を受け取ったというのはすごい。だって、この時代の中国では、大学に進むのは戦前の日本の帝国大学への入学に匹敵するほどの難関では・・・？ もっとも、それは北京には北京大学と精華大学という超エリート校があるところ、北清大学はそれをイメージした架空の大学だという前提に立った場合の話。

後に描かれる天安門事件に参加した大学生は、もちろん北京大学、精華大学以外の学生にもたくさんいたが、日本の学園闘争と同じで、そこではエリート校のリーダーたちが活躍していたことは明らか。愛媛県松山市から大阪大学へ単身出かけてきた私ですらその旅立ちに大きな夢を抱いていたのだから、図門のド田舎から北京の北清大学に進学するユー・ホンが大きな夢と希望を抱いていたのは明らか。さて、その行方は・・・？

## ■□■ 上京に先立ってやるべきことは？ ■□■

五木寛之の小説『青春の門』では、石炭のまち、筑豊の飯塚市から早稲田大学に入学するべく上京していく主人公の伊吹信介は幼なじみの牧織江と清い別れを告げたが、ユー・ホンの場合は北京に出かけるについて、やはりシャオ・ジュンとの初体験という儀式を済ませる必要があったようだ。日本ではラブホテルという便利なものがある。また日本は、金益見という女性の神戸学院大学院生が博士論文のテーマとして「ラブホテル」を取りあげ、『ラブホテル進化論』という本(文春新書)を出版し、それがベストセラーになるという国だが、1987年の中国東北部地方の図門にそんな便利な施設があるはずはない。すると、2人が交わす初体験はいつ、どこで、どんな態様で・・・？

そんな過激なセックスシーンその1は、あなた自身の目でしっかりと。

## ■□■ ロウ・イエ監督の新人発掘能力は？ ■□■

ロウ・イエ監督は主演女優として『ふたりの人魚』では周迅(ジョウ・シュン)を、『パール・バタフライ』では章子怡(チャン・ツイイー)という有名女優を起用したが、『天安門、恋人たち』ではテレビドラマに出演していただけの女優ハオ・レイをヒロインに抜擢した。新人女優の発掘に抜群の能力を発揮したのは張藝謀(チャン・イーモウ)監督。デビュー作の『紅いコーリャン』(87年)では鞏俐(コン・リー)を発掘し、『あの子を

探して』(99年)では魏敏芝(ウェイ・ミンジ)を、『初恋のきた道』(00年)では章子怡(チャン・ツイイー)を、そして『至福のとき』(02年)では董潔(ドン・ジエ)を発掘した。さて、ロウ・イエ監督のハオ・レイ抜擢の成否は？

## ■ヒロインの魅力は？■

『キネマ旬報』7月下旬号の「REVIEW 2008 Part 2」では、4人の映画評論家がこの映画を評論しているが、その採点は3点、2点、4点、2点の計11点、まずまずの評価だが、私が面白いと思ったのは、この映画の特徴である過激なセックスシーンとヒロインの魅力についての評価が、作品の評価の分かれ目になっていること。それは例えば、4点をつけた塩田時敏氏は「青春を駆け抜けるヒロイン役の新人ハオ・レイが圧倒的な魅力にあふれている。その男好きする表情もさることながら、中国映画にあるまじき(笑)セックス描写が衝撃的」としたのに対し、2点の萩尾瞳氏は「ヒロインに、どうにもシンパシーが持たなくて困った」と書いていることから明らかだ。

私は基本的に塩田説に賛成で、彼女の「男好きする表情」にハマってしまったが、残念ながらそのヌード姿の魅力はイマイチ。ちなみに、黒木瞳が『化身』(86年)でデビューし、美しいヌード姿を拝ませてもらった時はまさに感激、感動だった。しかし、今回ハオ・レイがベッドで横たわる時に見せてくれるヌード姿は、黒木瞳のヌード姿の美しさに比べるとイマイチ。何度も見せてくれるセックスシーンでの積極的な姿勢や歓喜の表情など演技力においては立派なものだが、造形美・女体美という点ではイマイチ・・・？

## ■あちらは「任務」のため。しかしこちらは・・・？■

ハードなセックスシーンを見せてくれた中国映画の代表は、李安(アン・リー)監督の『ラスト、コーション』(07年)と今回のロウ・イエ監督の『天安門、恋人たち』。その過激さと濃密さにおいては甲乙つけ難いが、私流に観た相違点をいくつか指摘したい。

第1は、『ラスト、コーション』の湯唯(タン・ウェイ)は若い時の黒木瞳タイプ(?)でヌード姿も美しかったが、ハオ・レイはイマイチということ。第2は、『ラスト、コーション』でタン・ウェイが演じた王佳芝(ワン・チアチー)は梁朝偉(トニー・レオン)扮する易(イー)1人に絞った濃密なセックスだったが、ユー・ホンの場合は①初恋の男シャオ・ジュン、②本命の男周偉(チョウ・ウェイ)(郭曉冬/グオ・シャオドン)の他、映画後半に登場する③不倫の男、④年下の彼氏ワン・ポー(白雪雲/パイ・シューヨン)などたくさんのおとの多様な(?)セックスに没入していくことになる。これはきっと、ユー・ホンの気性の激しさとその裏返しとしての不安感のなせるワザだろうが、あの時代の中国であればほどの華麗な(?)男遍歴はかなり特異・・・。

第3は、この違いが1番大きいのだが、セックスの目的の違い。すなわち、『ラスト、コーション』でのワンのセックスは、後半は別として、少なくとも最初はセックスを通して

イーから情報を集めるという任務のため。しかし、ユー・ホンの場合は、「セックスは私の良さを知らしめる1番の方法」という価値観に沿った実践の一コマにすぎないようだ。あの時代の中国東北地方の田舎娘が、なぜこんなセックス観、価値観を持っていたのか少し不思議だが・・・。

## ■運命の男は、やはりイケメン?■

私は2003年11月1日～4日のはじめての北京旅行で三里屯にある洋街を訪れたが、1987年頃でも既に北清大学の学生たちは音楽や踊りなどでは西洋の文化をとり入れて楽しんでいただろう。それがこの映画を観ればよくわかる。李継賢（リー・チーシアン）監督の『1978年、冬。』（07年）はこれより時代が10年前だし、舞台も山西省の西幹道だから、せいぜい入ってくる情報はラジオからの海外放送程度。それに比べれば、1987年の北京の北清大学の学生たちの自由度と外国文化の楽しみ方はケタ違い。

ユー・ホンが入った女子寮は4人部屋で、ルームメイトはマザコンの冬冬（トントン）（曾美慧孜/ツァン・メイホイ）など個性豊かな人ばかり。しかし、ユー・ホンはそれ以上に目立った存在だったようで、1人屋外でタバコを吸っているユー・ホンに対して、李緹（リー・ティ）（胡伶/フー・リン）が声をかけてくることに。誰でもそうだろうが、大学に入って最初のできる友人が誰かによって、その人の人生が大きく変わるもの。ユー・ホンも、芸術家タイプで大人びたリー・ティと親友になったことによって、その後の人生の方向が決まることに。

さらに、人生の決め手になるのが最初のできる恋人。ユー・ホンの場合は、リー・ティの彼氏ローグー（張献民/チャン・シャンミン）の友人でハンサムな青年チョウ・ウェイを紹介されたことが運命的な出会いとなった。だって彼こそ、ユー・ホンが「これこそ自分が求めている理想の男性」と思える男だったのだから。そんな運命の男が定番どおりのイケメンという設定は少し気に食わないが、そんな個人的な感情（ひがみ？）はさておき、その後のユー・ホンとチョウ・ウェイの恋の進展状況は・・・？

## ■これでアウト?■

『天安門、恋人たち』は第59回カンヌ国際映画祭コンペティション部門に正式出品され上映されたが、それを受けて中国当局は①国内での上映禁止、②5年間の映画製作の禁止の処分を下したから、中国の人たちは同じく上映禁止とされた『ふたりの人魚』と共に鑑賞の機会に恵まれないことになる。1987年の天安門事件を映画に描くことが難しいのは、中国の政治状況からすれば仕方ないが、私の目にはこの映画で描かれる「天安門事件」はほんのサワリだけ。つまり、学生たちが「自由は天地に属す」「民主化を進めよ」などのスローガンを叫びながら集会やデモをしているだけ。また、この映画のヒロインであるユー・ホンや恋人のチョウ・ウェイ、そしてリー・ティとローグーたちは政治活動より

恋愛活動の方に熱心なタイプ。したがって、彼らは大学全体の雰囲気に乗っかって集会に参加してただけだから、学生時代これくらいの経験をしておくのも悪くはない、などと私などは簡単に思ってしまうから、「たったこれだけでアウト・・・？」とビックリ！

ちなみに、この映画は日本でもR-18指定とされているくらいだから、セックス描写の過激さにおいても中国当局が目くらめをたてたことは容易に想定できる。したがって、上映禁止処分と5年間の映画製作の禁止の理由が天安門事件を扱ったことその他、セックスシーンの過激さにあるとすれば、少し納得・・・？

## ■□■一着のジャケットの価値は？■□■

この映画のプレスシートには、「茶のコーデュロイのジャケットの娘が、紺のジャージの若者と出会う」という書き出しから始まる北川れい子氏（映画評論家）の「ジャージを着た自由」というタイトルのコラムがある。この映画の前半は、大学時代のユー・ホンを中心とした青春群像を描いていくが、そこで印象深いファッションが、ユー・ホンのお下げの髪形と茶のコーデュロイのジャケット。

ユー・ホンが大学に入学したのは1987年頃。この時代の日本はもっと豊かだから、女子学生がいつも同じ一着のジャケットということはありません。しかし、私が大学に入学した1967年頃には私もユー・ホンと同じくフラノの紺のジャケット一着を毎日着ていたものだ。経済的に豊かになれば、当然ジャケットやスーツの数も増えてくるが、私にとっては学生時代にあの一着のジャケットに愛着がある。それはあの服を着て、どこで何をしたかというたくさんの思い出がいつまでも残っているから。そしてそれは、きっとユー・ホンも同じ。さて、ユー・ホンは大学を辞めてしまった10年後、いつも着ていたあの茶のコーデュロイのジャケットから何を思い出していたのだろうか？

## ■□■図門から深圳へ、そして武漢へ、重慶へ■□■

ユー・ホンがチョウ・ウェイに対して別れ話を切り出すのは天安門事件勃発の少し前だが、それは一体なぜ？それがロウ・イエ監督が描くこの映画で、ユー・ホンを主人公とした女ゴコロの複雑さ・・・？また、天安門事件に少しだけ巻き込まれたユー・ホンが、北清大学を訪れてきた故郷の昔の恋人シャオ・ジュンと共に大学から姿を消してしまったのはなぜ？それがユー・ホンを主人公としてロウ・イエ監督が描いた、あの時代の青春群像劇のポイント・・・？映画後半は、大学のキャンパスを舞台として自由闊達に生きる若者たちの姿から一転し、ユー・ホンが各地を転々とさまよう姿が描かれる。その舞台は、多分いったんはシャオ・ジュンと一緒に戻った故郷の図門から一転して深圳へ。そしてさらに武漢へ、重慶へと移っていくが、当然ながらそこには常に男性の姿が・・・。

『エマニエル夫人』（74年）とは時代も場所も境遇も全く異質だが、女の生き方という点では思わず私はそんなフランス映画を思い出してしまうほど、ユー・ホンの生き方には

常にセックスが。ちなみに、私が試写室でよく一緒になる若手ライターは映画鑑賞後、「日活ロマンポルノを観ているようでした」と感想を述べていたが、私も半分それに同感・・・。

## ■舞台はベルリンまで■

ユー・ホンのセックス観や生き方に大きな影響を及ぼしたのが親友のリー・ティだが、自由を求める学生時代の自堕落な生活(?)の中ではたまに突発的なセックスが生まれることもある。つまり、ユー・ホンの恋人はチョウ・ウェイ、リー・ティの恋人(夫)はローグーと「固定」していたはずなのに、ある日私の目には信じられない組み合わせでのセックスが・・・?

天安門事件が悲惨な結果を迎えた後ユー・ホンは大学を辞め、シャオ・ジュンと共に姿を消してしまっただが、リー・ティとローグーは何とドイツのベルリンへ。当局からの追及を逃れてアメリカに亡命した天安門事件の指導者たちは多いが、リー・ティやローグーのベルリン行きはそういう意味ではない。だって、リー・ティもローグーも決して学生運動のリーダーではなく、単に西欧的な自由を欲していただけだから。

ロウ・イエ監督がなぜリー・ティとローグーをベルリンへ行かせたのかは、1989年の天安門事件と1989年のベルリンの壁崩壊を関連づけたかったためだろうが、そこに少し違和感があることは事実。ちなみに、ベルリンで見せるリー・ティの不可解な行動にも注目!これは一体なぜ・・・?

## ■北戴河での再会は?■

中国河北省にある秦皇島市の北戴河区は渤海湾に臨む著名なリゾート地で、北京から東へ280kmの位置にある。私たち日本人が北戴河をよく知っているのは、毛沢東をはじめ中国共産党の指導者たちが7月になると北戴河へ避暑と休養に行き、その間戦略的に重要な議題を話し合う非公式の会議である「北戴河会議」を数多く開いたため。

この映画のラストには、天安門事件から10数年を経過した今、北戴河で再会するユー・ホンとチョウ・ウェイの姿が描かれる。もちろん、チョウ・ウェイはベルリンにいる間もユー・ホンのことを想っていた。他方、身体の上を多くの男たちが通りすぎていったユー・ホンにとっても、自分の理想の男性がチョウ・ウェイであることは十分わかっていたはず。大学時代の友人のツテを頼ってユー・ホンの所在を知ったチョウ・ウェイが、ユー・ホンと再会したのは北戴河。車で北戴河まで走り、北戴河の海辺に立つ2人だが、そこで交わされる会話とは・・・?これが、この映画最大のポイント。そしてまた、再会後の2人の行方は?こんな映画にハッピーエンドがないことは当然だが、あまりにも切なく悲しい幕切れには一瞬戸惑うかも・・・?さて、これをどう味わえば・・・?

2008(平成20)年10月6日記